

研 究 交 流 報 告 書

平成 30 年 11 月 24 日

上 越 教 育 大 学 長 殿

所属・職名 自然・生活教育学系・教授
氏 名 古屋 光一

	期 間	旅行区間及び滞在地	研究機関
研究交流日程	30 年 11 月 11 日～30 年 11 月 17 日	上越市	上越教育大学
研究交流テーマ	理科教師の「探究に基づく学習」(IBL)のとらえかたとその実践 ：日本、米国と中国との比較研究		
研究交流の概要 及び 研究交流の成果	<p>研究交流の概要 ノエミ・ウエイト(Noemi Waight)博士が本学に来校した。 博士はニューヨーク州立大学バッファロー大学 (University at Buffalo) の大学院教育学科准教授である。研究交流テーマについて、以前より調査計画を立て、日本・アメリカ (NY 州) ・中国 (杭州市) の現職の理科教員の調査を実施して、3 つの国の探究に基づく学習を、どのように捉えているか調査を行う。 また、今回は特に、質的調査の実施方法を検討した。その中で、具体的な実践のビデオ収集も今後行う予定である。</p> <p>研究交流の成果 (本学における教員養成の機能強化との関連や、本学が掲げる中期計画・年度計画に係る取組の推進との関連について、具体的に記載願います。) 中期計画 4 (1) グローバル化に関する目標を達成するための措置、44 に従い、国際研究プロジェクトとして、この研究を行う。現在日本では、習得・活用・探究の学びの過程の重要性が指摘されている。しかし、特に探究学習の実践は必ずしも十分ではない。これを日・米・中で比較して、共通点や課題を明らかにする。それを地域の教師及び学生たちに伝えることで、実践がよりよいものになると考えてこの研究を行う。</p>		
研究交流の成果の還元に関する具体的な方策 (今後の計画)	<p>NARST (全米科学教育学会) の年会における発表、日本理科教育学会における発表、EASE (東アジア科学教育学会) における発表を想定している。また、地元の理科教師にも、このことを伝えたいと考えている。 さらに、この研究で明らかになった日本の探究に基づく学習の優れた点、課題を大学院および学部の授業で学生たちに伝えることを考えている。</p>		
研究交流中の感想又は希望等	<p>ウエイト博士は、上越教育大学にとっても良い印象を持ってくれたようである。 また、大学院、学部生を対象にした講演を実施した (11 月 14 日 (水) 16:20-18:10)。学生たちも積極的にこの講演を聞いて、質問をしており、学生たちのこのような態度についても良い印象を持ったことを、伝えてくれた。</p>		

(注) 記入スペースが狭い場合は、縦に広げて作成してください。